僕とゲームとエグゼイド

味噌神のスペリア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダーエグゼイドの適合者
吉井明久はゲーマドライバーとマイティアクションの力で
クラスメイトを守ることが出来るのか？
そして、立ち上がる四人の戦士の物語

注意事項
原作よりも頭がいい明久になっております
ヒロインは未定です
弱アンチが入っていますがすぐに救済します
ただあるキャラだけ強アンチになります
エグゼイド要素が強い為
バカテスの召喚獣要素は少ないです
原作キャラ死亡は皆さんの感想で決まります

この小説は評価1から3が付くと消すことになりますので
つまらなかった方は評価を押さず
ブラウザバックを推奨します。
おもしろかった方はお気に入りや感想などを
よろしくお願いします！

目　次

始まりの日 ―― 1
Ｆクラスの現状 ―― 4
初変身！マイティアクションＸ ―― 7
ノーコンテニュー ―― 11
動き出す影 ―― 15

始まりの日

僕の名前は吉井明久
僕は昔に重い病気で入院していた
重い病気を治す為に手術をしないといけない
ただ成功が難しい手術だと僕は聞いた
だけど、早く治りたいもあって僕は手術をし成功した。
目を覚ますと目の前には僕を治してくれた
先生が見え先生は言った。
「よく頑張ったね…ご褒美にこのゲームをあげよう」
先生は僕にご褒美にゲーム機をプレゼントして貰った
「明久君…これからキミは大変なこともあるだろう…だけど
それを乗り越え立派な大人になって欲しい」
先生の言葉に僕は先生に憧れを感じた
将来　僕は先生みたいな立派なお医者さんになりたいと
僕は退院後はお姉ちゃんと両親に将来のことを話すと
皆は僕が将来　医者になることに賛成してくれた。
僕は先生が貰ったゲームをしながら医者になる為の勉強もした。
そして…高校生になり僕は文月学園に入学することに決めた。
僕はこの学校で最高の友たちと共に戦うことになるとは
まだ知らない

文月学園
春　入学式の日
一人の少年が走っていた。
「はぁはぁ…ヤバイ…寝坊しちゃったよ…」
僕は吉井明久…現在、寝坊してしまい遅刻ギリギリの状態である。
遅くまで勉強していたせいで寝るのが遅れた理由だが
遅刻したら言い訳にしかならないから急いでいる。
「遅いぞ！吉井！」
門の前につくと一人の先生が明久に声をかけた。

「おはようございます！鉄人！」
「鉄人じゃない！西村先生と呼べ！吉井」
「冗談ですよ　西村先生」
「たっく…そうと吉井…すまなかった…」
　西村先生は明久に謝る
　西村先生が謝る理由は別の話に
「大丈夫ですよ…西村先生が悪くありませんし
　３年の頃にはＡクラスになって見せますよ」
「そうか…吉井のクラスはＦクラスだ
　それと学園長が呼んでいたからそのまま学園長室に向かってくれ」
「分かりました！西村先生」

　明久は門を通り過ぎそのまま学園長室に向かった。
　すると学園長室から声が聞こえ
　明久はドアをノックして学園長室に入ると
　そこには、学園長とスーツを着た若い男性が居た
「学園長　お呼びですか？」
「来たかい…話があるのはここにいる奴から聞きな」
　するとスーツの男性が明久の前に立ち
　笑顔を浮かべた。
「初めまして、私はゲームコーポレーションの社長をしています　壇
　黒谷です」
「は、初めまして…吉井明久です！ゲームコーポレーションって言え
ばマイティアクションゲームを作りあらゆるのジャンルゲームを
作った有名な会社じゃないですか？何故、この学校に？」
「そうだね…私は学園長さんとは学園の召喚獣システムを作った仲で
ね…今日は吉井明久君に頼みがあって来たんだ」
「僕にですか？」
「そうだよ…ゲーママスターのキミにね」
　ゲーママスター…それはあらゆるジャンルゲームの大会で
　優勝した者にしか与えられない称号である。

「確かに僕はゲーママスターですが…僕に頼みとは?」
「そうだね…今世界はある新型ウィルス　通称ゲーム病と呼ばれる病気が進行しててね…」
ゲーム病…患者のストレスを餌にしウィルスが成長すると
バグスターと呼ばれるゲームバグスターが生まれ
人を殺してしまう病気
「そのゲーム病と壇さんが繋がることって?」
「そうだね…私はバグスターに対抗する為にあるドライバーを生み出した…それがゲーマドライバーと呼ばれる物だ
そのゲーマドライバーをキミにゲーママスターであるキミに装着員として使って欲しいんだ」
壇　黒谷の言葉に明久はビックリした
ゲーム病が広まれば確実にウィルスはバグスターを
生み出し患者を殺してしまう
明久のある決断を下す。
「分かりました…ゲーマドライバーの装着員になります!」
「ありがとう!吉井明久君!では、これを」
壇　黒谷は明久にスーツケースを渡した
「この中にゲーマドライバーが入っている…バグスターは
人間の体内に潜伏しているからスーツケースの中にバグスターを探す機械とドライバーが入っている…」

明久は中を開けると少し色が鮮やかなドライバーと
ピンク色のガシャットと聴診器に白衣が入っていた。
明久はゲーマドライバーの装着員になることになった

Fクラスの現状

明久は壇　黒谷から貰ったドライバーと聴診器を自分の鞄に入れピンク色のガシャットを見る。
「これって…マイティだよね？」
ガシャットに書かれた絵は
マイティアクションゲームに出てくる主人公
マイティだった。
明久が最初にしたゲームで一番の得意ゲームだった
「僕のゲームはアクションゲーム？…よく分からないしな…」
明久はマイティアクションガシャットを胸ポケットに入れると最後に白衣を掴み　それを着ることにした。
「うわー！医者みたいだ！先生みたいな立派な医者になりたいし…僕が新型ウィルスを倒して見せる！…って！ヤバイ早く教室に行かないと」
明久はこれから自分が通う教室に向かった
明久のクラス　Fクラスは
成績が一番悪いクラスでかなりの問題児が集められたクラスであった。
「…なにこれ…さっき見たEクラスよりも酷いじゃないか…
仕方ない入るか」
明久は扉を開けるとそこには教師が立っていた
「遅れてすいません！」
「ん…吉井君ですね？遅れた理由は西村先生から聞きました…取り合えず自己紹介だけお願いします」
「わ、分かりました！」
明久は先生の横に立つとクラスメイトの顔を見ると
友達の姿があり明久はほっとしていたが
机がちゃぶ台で椅子が座布団にカビた畳…酷い
「僕は吉井明久です！将来は医者になることを目指しています！気軽に明久でも呼んで下さい！」

すると、Ｆクラスのメンバーがざわつく
『お、おい！吉井ってＡクラス並みじゃなかったか？』
『何故、このクラスにいるんだ？』
「よろしくお願いします…吉井君の席は坂本君の横に」
「はい！」
明久は坂本と呼ばれる男子の横の席に座ると
坂本と明久は笑みを浮かべた。
「よぉ…明久！Ｆクラスに来たみたいだな？」
「まぁ、あれがあったから仕方ないけどね…雄二だって
何でＦクラスに？」
「ん？まぁ、お前らとまた１年楽しみたかったもあるが
色々あるんだよ」
坂本　雄二…僕の友達でかなり頭もいいし
噂では霧島さんと呼ばれる美人と付き合ってる噂もある
「これからよろしくね？」
「おぅ」
明久は先生の話を聞いていると
ドアが開きそこにピンク色の髪をした女子生徒が入って来た
「遅れてすいませんでした！」
そう…彼女が入った瞬間
Ｆクラスの皆は驚いていた。
何故なら彼女は…
「自己紹介をお願いします」
「は、はい！姫路瑞希です！よろしくお願いします！」
「はい！質問です！」
一人のＦクラスの生徒が手を上げた
「あっはっはい！なんですか？」
「え～と…なんでここにいるんですか？」
彼女もまたＡクラスの学力を持つから
Ｆクラスに来たことで皆　ビックリしている。
「そ　その…試験の最中　高熱を出してしまいまして…」

まぁ、知らない人は知らないだろう
僕は振り替え試験の教室が一緒だったから知っている。
僕がＦクラスに来た理由の一つだしね
「あぁなるほど！俺も熱（の問題）が出たせいでＦクラスに」
「あぁ科学だろ？アレは難しかった」
「俺は弟が事故に遭ったと聞いてそれどころじゃなくて…」
「黙れ一人っ子」
「前の晩　彼女が寝かしてくれなくてさぁ～」
「「今年一番の大嘘をありがとう！」」
流石　Ｆクラスだって言葉しか出ないよ
すると姫路さんは雄二の隣の席へと座った。
「では、自己紹介は終わりま…」
ガラガシャンと机が壊れた
「えー替えを用意してきます」
福原先生は替えを取りに行くため
教室をあとにした。
これからこのＦクラスのメンバーたちと共に
戦いの渦に呑まれ　戦い哀しみ
そして、僕たちの運命は神しか知らない

初変身！・マイティアクションX

先生が戻って来るまでは自習かな？
他のメンバーたちは本を読んだり駄弁っている
すると、姫路が明久に近付き話しかける
「あ、あの…吉井君」
「ん？姫路さん？どうかした？」
「その…あの時　ありがとうございました！」
「大丈夫だよ？それより姫路さんは大丈夫だった？」
「はい！吉井君のお陰です」
そう…あれはクラスの振り分け試験の日
僕はテストを受けていると突然　姫路さんが倒れた
「姫路さん！」
「吉井　座りなさい…今はテストの途中だ」
「そ、そんな！姫路さんが倒れたんですよ!!」
「姫路　途中退室は点数は無しになるがいいか？」
「は、はい…退室します…」
姫路は息切れをしながらそう言った
「なら、皆の邪魔にならないように退室しなさい」
「なっ！先生！姫路さんが可哀想です！一人で行けそうではありません！」
「吉井　座りなさい…お前も点数無しにするぞ」
「構いません…テストよりも人が大事です！教師なら分かるでしょ！
僕も退室します！…大丈夫？姫路さん？」
「吉井君…ごめんなさい…」
明久は姫路をおんぶし教室を退室した
そして、二人はFクラスになった。

「姫路さんが無事でよかったよ」
「はい！ありがとうございます」
「…明久…」

「明久は優しいやつじゃのう」
「あれ？ムッツリーニと秀吉！二人もＦクラスだったの？」
　木下秀吉と土屋康太
　１年の頃の友達で秀吉とは小学生の時の友達だ
　秀吉には双子のお姉さんがいるがここにはいないし
　賢いからＡクラスにいるかも知れない
「うむ！ワシもあの教室で受けてたからのぅ…だから、ワシもＦクラスに来たのじゃ」
「…俺もだ」
「そうか…二人ともありがとうね」
　明久は二人に感謝していると明久のケータイが鳴る
「ん？誰だ？…はい、吉井です」
『繋がったようだね？壇　黒谷です』
「壇さん！何故、僕の番号を」
『学園長から聞いたんだ…吉井君　キミに患者だ
　バグスターウィルスの患者がＤクラスにいる』
「バグスターウィルスの患者ですか？それは誰ですか？」
『Ｄクラス代表の平賀源二君だ…バグスターウィルスを見つける時は聴診器のボタンを押すと体を調べてくれる…そして反応があったらドライバーを使ってくれ　そうするとドライバーから発生するゲームエリアが現れバグスターが強制的に姿を表す…そして、吉井君が倒すんだ　』
「分かりました…やってみます！」
　明久はケータイを消すと立ち上がり
　三人に言った。
「ごめん！少し用が出来たから行ってくるよ！」
　明久は急いでＤクラスに向かうと
　丁度Ｄクラスから平賀が苦しそうに教室を出ていた
「大丈夫!?」
「くっ…はぁ…吉井くん？…何故　ここに？…」
「平賀君…少し調べるよ」

明久は聴診器のボタンを押すと
平賀のからだを調べるとウィルス反応がしていた。
「…やっぱり壇さんの言う通りなら…平賀君　歩ける？」
「あ、あぁ…俺の体に何があるんだ…」
「平賀君！僕が何とかしてみせる！ますば何処か広い場所に…」
明久は平賀を取り合えず屋上に連れていくと
平賀を地面に寝かすと明久はドライバーを腰に当てると
ベルトが装着される。
「吉井…助けてくれ…」
「大丈夫…僕に任せて」
明久は胸ポケットからガシャットを取り出し
ガシャットを起動させる。
《マイティアクションX！》
ガシャットを起動させるとゲームエリアが展開され
チョコみたいなブロックが辺りに配置される。
風が明久の髪をなびかせると
明久は笑みを浮かべる。
「平賀の運命は…俺が変える!!
変身!!」
左にあるドライバー中央寄りのスロットにライダーガシャットを
挿入する。

《ガシャット！レッツゲーム！　メッチャゲーム！　ムッチャゲーム！　ワッチャネーム!?アイム　ア　カメンライダー！》
明久は二頭身のゆるキャラに変身した。
「…ん？お？おー！すげぇ！マイティだ！」
明久は自分の姿に興奮していると
平賀の体から茶色いのデカイバグスターが現れる
「コイツがバグスターか…俺がノーコンテニューでクリアしてやるぜ！」

明久の初戦闘が始まる。

ノーコンテニュー

「さてと…俺は説明書を見ないタイプだから軽く試させてもらうぜ！
バグスター！」
　バグスターは明久に目掛けて突進してくるが明久はブロックを踏み台にしながらバグスターの攻撃をかわす。
「よっ！ほっ！こっちだ！」
　バグスターの攻撃を避けながら小さな打撃攻撃を当てて行き
　バグスターの体力を減らしてゆくと明久は近くのブロックを破壊するとブロックからメダルらしきものが現れるとメダルは明久の体に吸収された。
「アイテムゲットだぜ！おらおら！」
　アイテムを吸収した途端　明久の動きが速くなり
　バグスターはなすすべも無く攻撃が当たり
　明久はトドメにバグスターの顎を狙いアッパーを繰り出すと
　バグスターは倒れ爆発を起こた。
「ノーコンテニューだぜ！」
　明久はバグスターが倒したと思った瞬間
　爆発で分裂したバグスターの塊たちが姿を変え
　デカイバグスターから大量のバグスターウィルスと
　ソルティバグスターが現れた。
「あ！お前は！ソルティはくしゃく！『マイティアクション』に出てくるゲームのボスソルティはくしゃく…」
『いかにも！私はソルティバグスター！貴様を倒す者だ！行け！バグスターウィルスたちよ！』
　大量に増えたバグスターウィルス戦闘員たちは
　ゆっくりと明久に近付いて行く

「これで倒してやるよ！」
《ガシャコンブレイカー！》
　ガシャコンブレイカーを手に持ち、そのまま

バグスターウィルス戦闘員の残りに突っ込んでいった。
そのバグスターウィルス戦闘員にガシャコンブレイカーを
叩きつけると〝ＨＩＴ〟という文字が現れた。
ガシャコンブレイカーに叩きつけられたバグスターウィルス戦闘
員はそのまま倒れ込み消える。
「おりゃ！どした！こんなものか！」
『舐めるな！』
「くっ！」
明久はソルティが放つ電撃を回避し少し距離を取る
ソルティはくしゃくにはソルティナックルと言う武装があり
電撃を放つ技もあるからかなり強敵である。
『レベル１の貴様は私には勝てない！』
「…なら、ウォーミングアップはこれぐらいで
充分だろう。
このまま一気に攻略するぜ！大変身！」
明久はポーズを決めた後ゲーマドライバーのレバーを
引いた。
〔ガッチャーン！レベルアップ！
マイティジャンプ！マイティキック！
マイティマイティアクションＸ！〕
ドライバーから現れるゲートを潜ると
レベル１の白いボディをパージするし
新たな体を広げて着地する。
前のデフォルメ頭身の体とは違って、人らしく
シュッとしたデザインをし、ピンク色ベースの体に
黒、ピンク、黄緑色の手足、そして背中にはＬｅｖｅｌ１の
顔が瞳が消えているものの装備されている。
「仮面ライダーエグゼイド！レベル２！」
『バカな！レベル２だと!?』
「一気に攻略してやるぜ！」
明久は再びガシャコンブレイカーを装備し、そのガシャコン

ブレイカーのAボタンを押した。
《ジャ・キーン!》
「フフッ…ジャ・キーン!」
するとハンマー部に収納されていた髪の部分が
起き上がり、そこから刃が伸びて剣へ変形した。
「行くぜ!はっ!」
『くっ!こしゃくな!』
ソルティは電撃を放つが明久はそれを避け
ガシャコンブレイカーでソルティに当てる。
「おりゃ!」
『ぐあぁぁぁぁッ!?』
ソルティは後ろに吹き飛ばされる。
「とどめは必殺技で決まりだ!」
《ガッシューン》

明久は、ゲーマドライバーからガシャットを
抜き出した後、キメワザスロットホルダーに挿し混んだ。
挿し混んだ後にホルダースイッチ押す。

《ガッシャット!キメワザ!》

右足にカラフルなエネルギーが収束された。
俺はさらにホルダースイッチ押した。
《マイティクリティカルストライク!》
「ハァッ!」
明久は高くジャンプし、そのままソルティに
連続キックを繰り出していき、最後に強力な
キックをソルティに叩き込んだ。
《会心の一発!》
強力なキックをくらったソルティは、
倒れこみ爆散した。

「よっしゃぁぁ!!」
《ＧＡＭＥ　ＣＬＥＡＲ！》

敵を倒して喜ぶ俺の周りにマイティアクションXを
含めたゲームタイトルが現れ、その中から
マイティアクションXに〔ＧＡＭＥ　ＣＬＥＡＲ！〕のマークが
押された。
明久は変身を解くと平賀に近寄る。
「…うっ…ここは？」
「大丈夫？平賀君」
意識が戻り平賀が辺りを見回す
「吉井が助けてくれたのか？」
「う、うん…僕が出来る限りのことはしたから
もう大丈夫だよ」
「そうか…ありがとうな！吉井！」
明久と平賀が互いに握手をした
仮面ライダーエグゼイド…吉井明久の戦いは始まったばかりだ。

動き出す影

明久がバグスターウィルスの戦闘を見ていた者がいた
その者は隠れながら明久と平賀の二人の様子を見ていた

「やれやれじゃの…明久もガシャットを使う日が来るとわ…ワシ…いいや、私も動かないとね」
その者の手には水色のガシャットを持っており
その者は静かにその場を後にした。

そして、Ｆクラスの教室
赤髪の少年は静かに呟いた。
「奴らが動き出したか…あの野郎を倒すのは俺だ」
赤髪の少年の手にも青紫色のガシャットが握られていた。

そして、ゲームコーポレーションの社長室
そこには壇　黒谷と影で隠れているが少年らしき人物が居た。
「…壇　黒谷…手術は受けた…俺にもドライバーとガシャットを渡せ…」
「分かりました。まさかキミに目をつけられるなんてね…
これが出来たばかりのガシャットとドライバーだ
キミが使いたい時に使うといい」
壇はスーツケースからガシャットとドライバーを取り出し
少年に渡した。
「…俺はアンタを信用していない」
「フフフ…知ってますよ…何故、吉井　明久君を巻き込んだかでしょ？」
「…分かっているなら、何故　明久にガシャットを渡した！」
少年は大きな声を出し壇に詰め寄る
「バグスターウィルスの絶滅の為ですよ？私がドライバーとガシャットを作らないと彼らを倒すことは出来ない

彼もまた…キミと同じですよ」
「くっ……分かった…バグスターウィルスの絶滅に協力はするが俺はお前を信用していない」
少年はドライバーとガシャットを持ってその場から消えると
壇　黒谷はパソコンを見ていると呟いた
「キミたちも覗きかい？」
壇が呟いたすぐに
違う扉から二人の男が入って来た
「アイツの始末なら俺がしてやるよ」
「グラファイト…キミはまだ動いてはダメだ
私の夢の為には私の代わりになって貰わないとね　」
「あぁ…分かってるよ」
「黒谷？これ新しいガシャット？」
もう一人の男が壇の引き出しから
四つのガシャットを見つけた。
「あぁ…ゲキトツ…ビート…コンバット…チャンバラのガシャットだ…まだ使える状態じゃないけどね」
「へぇ…」
「グラファイト…仕事だ…もっとウィルス感染者を作り出し
バグスターを生み出せ」
「了解」
グラファイトは社長室から出ると
壇と青年はパソコンを見る。
「彼は素晴らしい才能を持っている…我々の夢の実現の為に」
「僕たちの夢…クロニクルの完成をね…」

その頃　明久は平賀と共に歩いていた。
「まさか吉井がＦクラスに行くなんてな」
「姫路さんのことがあったから仕方ないよ」

「だけど、もし何かあったら相談してくれ！」
「うん！ありがとう！平賀君」

動き出す影たち…明久はどう運命を変えるのか？
壇たちのクロニクルとはいったい何なのか？